

生活者が鳴らす音からライフスタイルをみる

How Do We Recognize One's Lifestyle From the Sound One Makes?

浦上 咲恵^{*1}
Sakie Uragami

諏訪 正樹^{*2}
Masaki Suwa

^{*1} 慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科
Graduate School of Media and Governance, Keio University

^{*2} 慶應義塾大学 環境情報学部
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

We are getting some information of one's personality and recognizing one's lifestyle from the sound one makes. However, how we recognize the information of one's lifestyle from the sounds is not clear. In this research, we discovered how the 1st author recognizes people's lifestyles from the sound each person made. We recorded the sounds of the people makes, and wrote down their characteristics we recognized from them.

1. はじめに

近年、筆者の周りには「足音ブス」が多く見られる。オシャレな装いをし、身なりが美しくあろうとも、履き揃えたハイヒールを出す足音が不規則で鋭く耳を突くようであれば、そこに上品さを感じることはできない。筆者は、自身の鳴らす音に無頓着な人のことを「足音ブス」と呼んでいる。このように外見を気かけ工夫を凝らすも、自らが鳴らす音が自身の気品や性格を顕著に表わしていることに気付かずにいる人は街中に溢れている。

我々は、絶え間なく、常に音を発している。会話中であれば声や息を、歩いていけば足音や靴が擦れる音を、食事中であれば食器を操る音や飲み物をすする音を必ず鳴らしている。日々の活動の中で知らず知らずのうちに鳴らしているこれらの音は、数々の行動選択の結果であり、我々自身のライフスタイルと無関係ではない。声を出すタイミング、靴の素材、歩き方、食事の速度など、生活者が自身の趣向により意識的にまたは無意識的に下した決断の表れでもある。

生活音に我々のライフスタイルの一端が現れるということは、同時に、生活者が鳴らす音は自己表現のツールとなり得るということでもある。我々は専ら服装・化粧や姿勢に気をすることで身なりを整えるが、従来省みられることの少なかった「自身が鳴らす音」も、重要な変数の一つである。足音が一歩一歩規則的に歯切れよく地面に伝われば、気品漂う女性を演出できる。オレンジジュースのストローで氷を鳴らせば、子どもっぽくかわいげのある女性を演出できるかもしれない。このように洋服やアクセサリを身につけて自身のファッションをコーディネートするように、生活で鳴る音を「身につけて」自分らしさを彩ることもできる。

本研究では、自己表現ツールとしての生活音を活用することをサウンドスタイリングと称し、新しい音の活用方法を提案したい。

しかしながら、我々は普段自身が鳴らす音に対しあまりに無頓着であり、スタイリングやデザインの目標設定を行うことが現状困難である。そこで、からだメタ認知[諏訪 08]を用い、我々が生活音から認識している生活者の情報を明らかにする取り組みを行う。筆者の身近な知人を対象に、彼らの鳴らす音及び発音体を観察し、それらから認識される人物像を記述する。他者の鳴らす生活音を観察する筆者の暗黙知を明かす。

2. 日常における自己表現を磨く

日々の生活の中で、自身の趣向や価値観を伝える自己表現の機会は少なくない。他者とのコミュニケーションにより直接言

葉で伝えることもあれば、服装や所持品により非言語的に伝えることもできる。我々は自己表現を当たり前のように、手軽に行っていると言える。

しかし、その手軽さは、我々が触れるメディアによる多くの情報蔓延により生み出されている。特に、非言語的な自己表現の代表格であるファッションの場合、ファッション雑誌やアパレル業界の生み出す流行をそのまま真似をしている人が多いという。[田中 14]は、蔓延する強い流行に飲まれずに、日々異なる作りたい自身の像を様々に演出するべきであると主張した。そのためには、自身が日々行うファッションスタイリングの意図を言語化し、評価することが重要であると言う。

情報過多の中、自身のこだわりを追求し自己表現の際の暗黙知を掘り下げるためには、より能動的な自己表現手法の開拓が求められると考えられる。

音を活用した自己表現は音楽の選択が主流であるが、演奏家や作曲家でない限り、多くの人は音楽を「聴く」ことしかできない。音を受け取る側としての姿勢表明に留まる。一方、生活者の鳴らす音や声は、日々の活動に伴い常に鳴っているものであるため、生活者自身のライフスタイルが表れやすい。また、生活者自身が加減を調整できるものであるため、自身の判断も表れる。より、能動的な自己表現の追及を目指すことができる。

上記の理由から、本研究では、音を切り口とした新しい自己表現手法として、生活者の鳴らす音「サウンドスタイリング」を提案する。

3. サウンドスタイリング

3.1 サウンドスタイリングの定義

サウンドスタイリングとは、自己表現ツールとしての生活音を活用する行為である。

空間で鳴る音の集合であるサウンドスケープから人々の生活様相を導いた[シェーファー 06]は、音と生活の強い関係性を活かし、サウンドスケープのデザインにより生活空間の向上を目指した。しかし[浦上 13]は、従来の音のデザインの多くがデザイナーからの一方的な施しに留まることを指摘し、生活者が自身の鳴らす音で各々の生活環境をデザインする手法 My サウンドスケープデザイン(以下 MySSD)を提案した[浦上 13]。

MySSD は、自身の鳴らす音のあらゆる役割を活用し、生活環境のデザインに役立てる。例えば、他者との関係性を構築するコミュニケーションツールとして、自身の精神状態を判定する気分測定器として、思い出を呼び起こすきっかけとしてなど、その役割は多岐に渡る。

連絡先: 浦上咲恵, 慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科, 〒252-8520 藤沢市遠藤 5322, urara@sfc.keio.ac.jp

サウンドスタイリングは、それらの役割の一つであるファッションツールやアクセサリといった自己表現のツールとして自身の鳴らす音を活用する行為を指す。

3.2 サウンドスタイリングにおける課題

サウンドスタイリングは、自らが鳴らす音により自己表現をする行為であるが、その表現行為には、「〇〇な自分を△△な音によって演出したい」という目標設定が必要となる。しかしながら、音がどのように自己表現に活用され得るのか、また、その音を出すことにより他者からどのように見られ得るのかがまだ解明されていない以上、目標創出は著しく困難となる。[浦上 13]で提案された音の活用手法は自己演出に特化していなかったため、上記の問いに対する答えは発掘されていない。

そこで、課題の解消のため、[中島ら 08]の提案する、新しいものが世に誕生するプロセスの一般的構造を示す FNS ダイアグラムを参考にする。これはある目標を実践し、生まれた現象の認識による新しい目標の創造過程である。目標(未来ノエマ: NF)をもとに環境に対し何らかの行為を実行し(C1)、現象を構成(ノエシス:A)すると、環境(E)との思わぬインタラクションが起きる。生じた現象を捉え(C2)、現象に対する認識(現在ノエマ: NC)を持つことにより、新しい目標が生成される(C3)。あらゆる創造行為がこれらの繰り返しで進む。

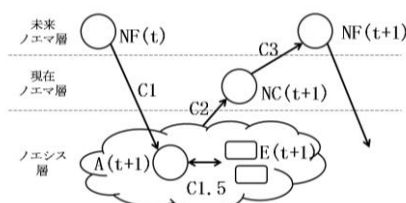


図1 FNSダイアグラム

サウンドスタイリングにおける課題である目標設定は、図1のC3を指す。C3を生むためには、現象に対する認識C2が必要となる。サウンドスタイリングの場合、鳴らす音がどのように作用したか、他者からどのように捉えられたかというインタラクション(C1.5)を認識する行為となる。つまり、C2を行うためには実際に鳴らされた音を観察し、環境と音との相互作用を考察する他ならない。本研究ではC1.5という予期せぬインタラクションの中から音の作用や他者からの捉えられ方を見出すことを目的とする。

4. 他者の生活音からライフスタイルをみる

4.1 他者の鳴らす音を観察する暗黙知

そこで、我々が他者の鳴らす音から認識している暗黙知を掘り下げる取り組みを行う。冒頭で紹介した「足音ブス」のように、他者の出す音に対して評価を与えることや発音者の人物像を見定めることは可能である。しかし、どのような評価をなぜ下すのか、どのような過程で判断するかは不明確である。環境と音とのインタラクションを観察するためには、これらの暗黙知を一人称的に記述し掘り起こすことが必須である。

手法は、からだメタ認知[諏訪 08]を採用する。からだメタ認知とは、身体と環境との間で生成される現象を言語化などによって外的表消化し、そのインタラクションを進化させる行為である。我々がどのような着眼点や思考回路により生活音を認識しているかを追求するためには一人称的記述は欠かせない。本論文では第一著者がその役を担う。より多くの細かい考察を得たいため、観察対象を接触機会の多い複数人を限定し取り組んだ。

4.2 生活音から観察できるライフスタイルとは

生活者が鳴らす音に対し評価を与えたり、人物像を想像したりし言語化する取り組みは、生活音からライフスタイルの一端を知る行為につながると考える。ライフスタイルという言葉の曖昧さを回避するため、本研究において扱うライフスタイルの定義を次に記す。ライフスタイルは4つの要素からなるとされる[日本総合研究所 07]。志向(何に関心があるのか)、嗜好(何に喜びを感じるのか)、環境(社会的条件・制約)、行動(実際になにを消費し、どの世に暮らすのか)である。そのうち、生活音に関連の強いライフスタイルの要素は行動であると考えられる。生活音は、数々の決断から構築された具体的な行動の結果として現れる。例えば、購入行為における判断は発音体に、対話における判断は声の大きさやタイミングに現れる。生活者の鳴らす音を聞くことで、彼らがどのような判断を下し行動をしているのかを垣間見ることができるという仮説のもと実践を行う。

5. 他者の鳴らす音を観察する

本章では、実際に行った実践内容について紹介する。

5.1 記録対象

記録対象となる人物は、男性の研究員Aさん、女性の大学院生Bさん、男性の大学院生Cさんの3名である。3名とも同研究室で多くの時間を共に過ごしている、第一著者の先輩にあたる。Aさんとは4年目、Bさんとは1年目、Cさんとは5年目の付き合いになる。

記録は、「この音、特徴的だな」と筆者が感じた時に行う。ミーティングや授業時など、共に時間を過ごしている中から、その人が鳴らした音に何かしらの特徴があると考えた時の現象をその場で記録する。記録の決定をする時点で、どのような点が特徴的であるかを言語化できている必要はない。

5.2 記録方法

(1) 観察カード

他者の音やそれに関わる情報を記録する手法として、記録カードを作成した(図2)。記入項目は以下の通りである。

- (A)通し番号
- (B)日付、時間、場所
- (C)備考、シチュエーション
- (D)聴いたもの
- (E)観たもの

聴いたものの記述手法は次の通りである。点線下部には、必要であれば発音内容を書き、それに対応する形で音に対する情報を書き入れる。左から右へ時間軸に沿って音量の起伏やアクセントの変化を記すこともあれば、音そのものの印象を図や画として書き表したものもある。空白スペースには自由にアノテーションを書きいれている。

観たものの記述手法は次の通りである。まず、点線で囲われたスペースに配置図を書き入れる。その他のスペースには、観察対象者の姿をスケッチする。服装や所持品の素材、移動があれば移動経路などを書き残す。

本実践は、あくまでも他者が鳴らす音を考察するためのものであるが、聴覚情報の考察のためには視覚情報や、発音時のシチュエーションが欠かせない。記録のきっかけは上記の通り聴覚情報であるが、記録時には聴覚以外の情報も忠実に記すことが求められる。

(2) 考察ノート

記録カードを書き終えたら、B5 サイズのノートに貼り、考察を行う。カードに残された情報に対し、どのように解釈をしているのかを自問自答しながら記録する。

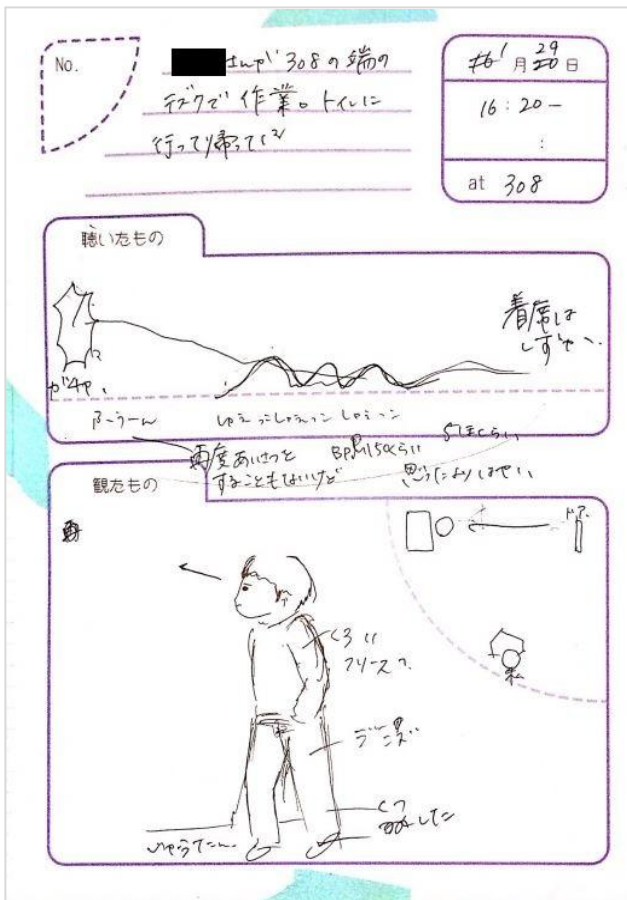


図2 記録カードの様子(事例11)

6. 他者の鳴らす音を観察する暗黙知の構造化

本研究の観察実践期間は2013年12月10日~2014年3月8日、事例数は23である。Aさんは9事例、Bさんは7事例、Cさんは7事例という内訳である。

本章では、上記の実践データに基づき、観察から解釈に至るまでの思考プロセスを構造化する。

6.1 観察から解釈までの思考プロセスの構造

他者の鳴らす音から人物像を想像するまでのプロセスは以下のように考えられる。

まず、観察により情報収集が行われる。その場で観察した情報は、(a)聴覚情報、(b)視覚情報、(c)シチュエーションの情報に分けられる。聴覚情報は、(a-1)発音者本人の音と(a-2)発音者以外の音に分かれる。

次に、それらの情報群の特徴の発見が行われる。観察で得た情報の掛け合わせに観察者の仮説や解釈が加わることで、発音者の有する特徴が導かれるのである。その際、観察時に得た情報だけでなく、(d)観察時以外の情報が思い出され、解釈の材料として加わることもある。これらは、観察時以外での発音者との接触により得た情報で、記録ではなく記憶から引き出される。

複数の特徴が導かれた後には、特徴同士の関係性が発見される。発見された関係性に対する解釈こそが、観察情報から得

られた発音者の発音行為に対する評価であり、人物像の一端を示すものとされる。

情報収集は観察カードにより行われ、以降は主に考察ノートにて行われている。以上のプロセスを図3に示した。

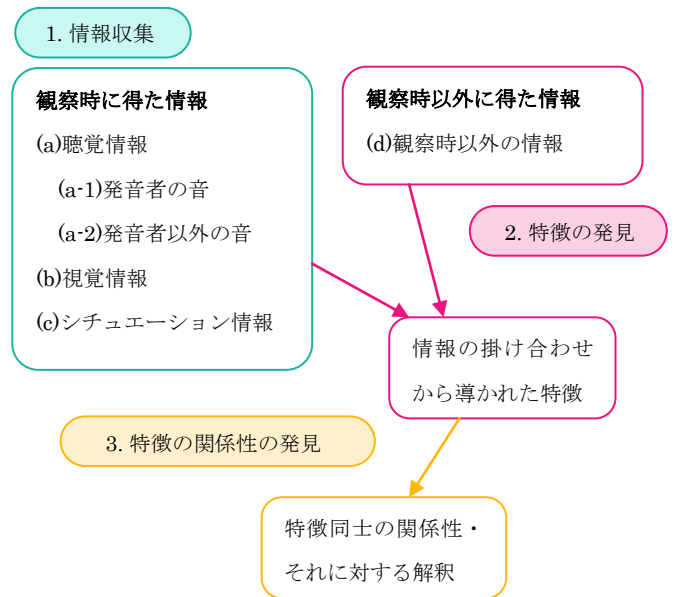


図3 観察から解釈までの思考プロセスの構造

6.2 事例紹介

以下、実際の実践データを6.1の思考プロセスに基づき構造化した実例を記す。観察時・観察時以外で得た情報からどのように特徴が導かれたか、またその結果どのような解釈が導かれたかが一覽できる。

観察時・観察時以外に得た情報欄では、6.1に基づき(a)~(d)の分類の通りに情報を整理した。ただし、(a)の時間情報が漏れないよう、発音者の情報と発音者以外の情報を分けずに記載した。さらに、各情報から導かれた特徴を線で繋ぎ、可視化した。

表1で整理した思考プロセスを紹介する。この事例は、Aさん、Bさん、Cさんと第一著者の4名で大学院生間のゼミを行った時の観察である。Aさんの発表中のBさんの様子を観察した。Bさんがミーティング中にチョコを一粒、こっそり食べる時の様子である。大事なミーティング中や他の人の発表中に密かにお菓子を食べる時の音には、その人に悪気があるかどうか表れる。私はよく授業中にこっそりグミを食べてしまうので、今回の彼女の行動には注目していた。そこで箱からチョコを取り出し口に運ぶまでのプロセスは、意外と多いことに気付く。箱を持つ、引き出す、チョコを取り出す、箱を置く、チョコを袋から出す、口に運ぶなどである。彼女はそれを2つのフェーズに分け、関連がない音であるように見せるために10秒ほどその間を空けた。一度に全てを行うと、小さい音とは言え、連続的に音を発し続けることになる。それでは音の密度が高く、気付きやすくなる。濃度を分けてしつこさを失くしたBさんの音は、秀逸であると考えた。特にチョコを口に運ぶ時の音を鳴らさなかった所は、食べる音と言うプライベートな音を他者に聞かせない配慮が通っている。礼儀はあるが、手慣れている女性的なかしこさを感じた。

表1 事例19の思考プロセス

日時：3月4日 場所：大学院棟会議室 発音者：Bさん		
観察時に得た情報	情報の掛け合わせから導かれた特徴	特徴同士の関係性、解釈
(a)聴覚情報 ・チョコの箱を持ち上げ、引き出す音「スタ」 ・引き出した箱からチョコをとる音「ステ」。 ・チョコを置く音「コト」 ・箱を置く音は聴こえない ・袋から取り食べる音は「コチョコ」のみ ・2つのフェーズ (b)視覚情報 ・セーター ・PCに隠れた場所にチョコがある ・肘より先しか動かさない ・チョコの方を見ない (c)シチュエーション情報 ・院生ゼミ中	・音質のあまり変わらない音が続く。必要最低円のアタックで、どの音も締まりがあった。毅然としている。 ・プライベートな音を他者に聞かせない、気付かせないための動作をしている	数ある動作を2つのフェーズに分けた所は、秀逸。1つでは音が鳴り続けてしまおうし、3つでは気付きやすくなってしまおう。食べる瞬間はあまり見られたくないものなので、そこで音を出さなかった所は女性として尊敬する。濃度を分けてしてこさをなくす技が見れた。
観察時以外で得た情報		
・普段から動きは単発的 ・礼儀とか知ってそう		

表2 事例5の思考プロセス

日時：12月10日 場所：研究室 発音者：Aさん		
観察時に得た情報	情報の掛け合わせから導かれた特徴	特徴同士の関係性、解釈
(a)聴覚情報 ・先生が発言する ・先生の発言に「うん、うん」とリズムをとる ・先生の発言に対し、周りが笑う ・周りの笑い声の収束し終わる頃に「Kさんのやつみたいだな」と言う ・Aさんの発言だけがかすかに残る (b)視覚情報 ・机に肘を掛け、頭を載せる。右斜めに重心を掛ける ・周りと同じスクリーンの方を向いている ・先生の隣 (c)シチュエーション情報 ・研究会授業時の、学部生による発表議論中	・先生の発言への反応が積極的で場のテンポを作っている ・観客というよりも司会者のような位置にいる ・全員が参加している笑いの収束時に個人的な（反応して新たな笑いに繋がらばらばら）つぶやきを重ねている	Aさんは笑いの後の沈黙を恐れていたのではないかと考える。笑いの収束時につぶやきを発したことで、笑いの後の突然の沈黙を防いだ。また、小さい音量であったことから、全員同じ反応をして場を共有していたフェーズから、個人の感想を持つフェーズに移ることを促した。音量の変化に敏感であること、同調せずに積極的に自分なりの反応をしている。空間内の場の雰囲気や責任感を持っている人なのだろう。
観察時以外で得た情報		
・Kさんを知っている人は多くはない ・Aさんは、笑いを作ることも多い ・笑いのピークよりも遅れて笑うことがある ・対話の流れに敏感な人である		

表2で整理した思考プロセスを説明する。この事例は、学部生も大学院生も参加する研究会の授業の1シーンである。

Aさんは、先生の発言に対し積極的にリズムカルに反応しており、その音が場のリズムを構成していると同時にAさんが観客ではなく司会者のような誘導する立ち位置であると考えた。その後、先生の発言に対しどっと笑いが起き、空間の音量は一気に上昇した。しかし、笑いが起きたあと、笑いの収束の沈黙が訪れることをAさんは知っている。先生の発言に対する反応をテンポ良く行っていることや、他の人と笑うタイミングがずれていることに加え、私から見てAさんは対話の流れに敏感であると感じる

人であるためである。笑いの収束時につぶやきを発したことで、笑いの後の突然の沈黙を防いだと上に、全員同じ反応をして場を共有するフェーズから、個人の感想を持つフェーズに移ることを促した。特につぶやきの内容が、誰かが反応し新たな笑いを生むものではないことも関係している。言葉を聴いた時、なぜ誰も反応できないことを目立つタイミングで言うのか疑問に思ったが、場がAさんの発言に反応せずに済む雰囲気に変化したことから、Aさんの発言が新しいフェーズへの移動を促したことに気付くことができた。これは、音が発された場との相互作用を観察したからこそ得られた解釈である。

このように、雰囲気を作る構成要素の一つである音量の変化にも対応できることから、場の雰囲気の変化に敏感な人なのだと解釈した。

6.3 目標設定の創出にむけて

このように思考プロセスを構造化し、それらを事例ごとに可視化することで、観察者自身が自ら鳴らす音により細やかに留意するようになった。また、音の解釈をするにつれて、どのような音で、どのような自分を表現したいのかを語る着眼点を得た。音の特徴が自身の印象にどのように寄与するのかを今後具体的に分析し、目標の創出に繋げたい。

7. おわりに

本論文では、生活者が鳴らす音による自己表現手法サウンドスタイリングを提案し、その課題に取り組んだ。デザインやスタイリングの創造過程で重要となる目標設定を行うための状況認識の粒度を高めるべく、他者が鳴らす音からその人の人物像を発見する取り組みを行った。結果、他者が鳴らす音やそれに関係のある観察情報から人物像を発見するまでの思考プロセスが整理された。また、生活者が鳴らす音という些細な現象に、各々のライフスタイルの一端が表れることを示した。自身が鳴らす音にこだわりを持つこと、そのこだわりを磨いていくことの価値を創造する研究に貢献したと言えよう。

謝辞

本研究の観察対象としてご協力くださった先輩方にこの場を借りて感謝申し上げます。

参考文献

[田中 14] 田中望美: インディヴィジュアルブランディングファッションブランドの真の姿を取り戻せ! 慶應義塾大学環境情報学部平成25年度卒業論文, 2014年1月。
 [シェーファー 06] R. マリー・シェーファー, 鳥越けい子, 小川博司, 庄野泰子, 田中直子, 若尾裕訳: 世界の調律-サウンドスケープとはなにか-, 平凡社, 569p, 2006。
 [浦上 13] 浦上咲恵, 諏訪正樹. 私が鳴らす音で生活をデザインする-My サウンドスケープデザインの実践・記録方法の提案-. 人工知能学会第27回全国大会, 1B4-6 (CDROM), 2013。
 [浦上 13] 浦上咲恵, 諏訪正樹, 井出祐昭. 毎日の「音 essay」執筆活動による感性開拓を試みる. 人工知能学会第16回身体知研究会, SKL-16-07, pp. 35-42, 2013。
 [中島 08] 中島秀之, 諏訪正樹, 藤井晴行: 構成的情報学の方法論からみたイノベーション, 2008。
 [諏訪 08] 諏訪正樹, 赤石智哉: 身体スキル探究というデザインの術. 認知科学, Vol.17, No.3, pp.417-429, 2010。
 [日本総合研究所 07] 財団法人日本総合研究所, 新しいライフスタイルの創出と地域再生に関する調査研究. 内閣府委託調査報告書, 2007。